

## ユリ乾板宮殿写真展

足立 龍枝

年末ソウルに滞在している時、中央博物館で「朝鮮総督府所蔵 ユリ乾板宮殿写真展」をしているというメールが入った。本当にラッキーなメールだった。

写真は1909年から1945年まで、朝鮮総督府が38,000枚のガラス乾板で撮影したもの。そのうち、宮殿関係800枚の中から500枚が企画展として展示されていた。

韓国には本宮殿である景福宮の他に昌徳宮・徳寿宮・慶熙宮・昌慶宮があり、それらを合わせた5宮殿は1平方キロ内に建てられている。

慶熙宮が門だけになり、ひとりの老人が白の民族衣装をつけて門の左端に座り込んでいる写真があった。

門の後ろは殿閣がぎっしりと詰まっていたところが更地になって、遠くに見えるはずのない仁王山が見えている。門の左の看板を読むと「統監府中学校新築工場」。統監府(1910年からは総督府)の役人の子どもたちのために建てられる京城中学校の敷地が宮殿跡に整地されている。梶山季之・森敷・金相玉監督などがその京城中学で学んだ。

門だけが残っている写真だったが、その門もやがて伊藤博文を祀る「博文寺」の門として移築され「慶春門」となる。

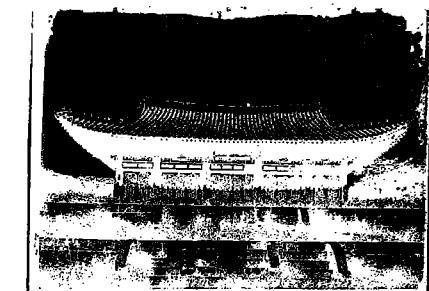
建てられた京城中学校の一部は、解放後は図書館として使用されていたが、今はなくなり、4~5年前に規模を小さくした宮殿が復元された。ソウルに行くと必ず通るところなので自然に目に入り関心もある宮殿だ。

本宮殿景福宮の西側は、宮殿すれすれに路面電車が通っていた。1926年、電車の振動で迎秋門の石垣が崩れ落ちるという事件があった。直後に写した写真は、朝鮮人・日本人の野次馬が集まっている。三角山が見える方向には電車が停まつたままだ。初公開の写真だった。つい最近、線路跡が見つかったという記事を何かで読んだ。

日本人梨本宮方子と政略結婚させられた皇太子英親王李垠殿下が、韓国に帰国した時の集合写真もある。昌徳宮勤政殿の前で、100人ぐらいが並んでいる写真だ。ユリ乾板と特に焼き付けたのが並べて展示されていた。

当時の総督は斎藤実。着物姿の夫人も写っている。男性はみな軍服だが、女性は民族服。方子妃は白のドレス。最後の国王純宗夫妻が中心に座り、男性は左、女性は右に分かれている。10歳前後の李徳恵がかわいく写っているのを見ると胸が痛い。

写真にはどれも詳しい説明はない。撮影した年も書かれていない。図録もまだ発行されていないので、辞書を引き引きパンフレットをすみすみまで読んだ。



(慶熙宮 崇政殿 正面)



ユリ乾板の「ユリ」というのは古代のガラスの呼び名。漢字で書くと「瑠璃」日本でも「ルリ」と言った。朝鮮ではそのまま朝鮮語になつたようだ。

写真技術は、ヨーロッパで18世紀の初めに発明され、1851年に湿板技術が開発されたが、感光乳剤が湿っているうちに撮影しなければならないという欠点があった。

1871年、ゼラチンをガラス板の上に塗りつけて乾燥させた乾板が発明され、大量生産が可能になった。また、光に敏感なので、瞬間的な動きを捉える能力は、湿板の50倍にもなつたという。

その後アメリカでロールフィルムが開発されるまで、ガラス乾板が広く利用されたわけである。

博物館所蔵の38,000枚のガラス乾板は、植民地時代(博物館のパンフレットによると、日帝強占期)に、日本人が制作して、朝鮮総督府博物館に保管されていたものを、1945年の解放(パンフでは光復)以後、国立博物館が所蔵するようになったものである。

総督府は朝鮮を植民地化して、効率的に統治するために、朝鮮の歴史的古跡・民俗・人物など多様な様子を写真に写して膨大な資料を作つた。

1902年から始まった統監府の調査事業には、建築学者関野貞(1867~1935)、人類学者であり、考古学者でもある鳥居龍藏(1870~1953)らが関わった。

総督府所蔵のガラス乾板は、單一コレクションとしても、また当時の記録としても世界的に最高のレベルだといわれている。

技術や数量が最高であるだけでなく、保管状態も比較的よく、写真の歴史にとって宝物とさえいわれている。

実際、ガラス乾板は重くて厚くて多くの保管は難しい。裂けたり、感光乳剤がはげ易いにもかかわらず、良質の乾板が傷まず保管されたということは、一つの事件であるとまでいわれる由縁だ。

また撮影に関わった技師たちの眼識で、朝鮮の文化遺産を美しい状態で記録しておいた点が評価されている。

構図と正確な露出で、品位のある写真におさまっていることが納得できる。

1895年に26代国王の王妃、明成皇后が暗殺されるという乙未事変があった。日本では角田房子氏の小説「閔妃暗殺」で多くの人に知られるようになった。

明成皇后(閔妃死後のおくり名)殺害現場の「乾清宮」は、事件後すぐに取り壊された。そして30年後、その場所に総督府博物館を建てた。そのときの地鎮祭の写真が初公開された。今までに見たこともないような盛大な地鎮祭で、何だかお祓いをしているような感じを受けた。その博物館も取り壊され、去年、110

年ぶりに乾清宮は復元された。

景福宮の正門である「光化門」を総督府庁舎建設のとき取り壊す話になつたが、日本人柳宗悦が内外に抗議文で訴えた結果、取り壊されずにつづき、門は宮殿の東北隅に移転された。

その門の屋根から南側を写した写真がある。宮殿のそばを、3年前に復元された清渓川の少し上流に当たる中学川が流れ、川では白い民族衣装の女性たちが洗濯をしている。現在画廊がたくさん建っているところには、藁葺き民家が並んでいる。

よく見ると、遠くの方には、すでに寄せ棟作りの日本風の建物も見える。総督府関係者の家だろうか。



1926年には、宮殿内に総督府庁舎が完成している。無数にあった宮殿内の建物は、1915年、宮殿を博覧会場にするという名目で、すでにほとんどが取り壊されている。国王に朝賀に上がるときに通る敷石は取り除かれ、草花が植えられている写真があった。

植民地化するということは、歴史を徹底的に破壊することだった。

ガラス乾板を大きく評価しながらも一方では、勤政殿の前に建てられた巨大な総督府庁舎は、宮殿を圧倒する破壊の極地であったとパンフレットでは締めくくられている。

写真家たちが、主觀を排除するということに徹して写した写真だ。その1枚1枚の写真から、背景に何があったのかを、研究者でなくても課題を追求し、確認しなければならない重要なガラス乾板写真展だったと思う。

(写真展の正式名は「国立中央博物館所蔵 瑙璃乾板 宮闈写真展」後日、図録も購入し、青丘文庫に置きました。)